
ライス 2000・ライス 2000

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライス2000・ライス2000

【Nコード】

N0575Y

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

ライスの2000字小説です。バイオレンス・コメディです。

(前書き)

前書きなんか無いよ。

かつちゃんが、故郷に帰ってきたとき、悦子はすでに光男と結婚していた。

「くそ。腹が立つ。オレのこと待っててくれるって言ったのに裏切りやがって」

かつちゃんはかなりキレていた。包丁を握り締め、二人のマンションへ出向いた。

ぴんぽーん。

「あれ。留守かな」

ぴんぽーん。

ぴんぽーん。

ぴんぽーん。

「やつぱりいないのかな」

とちょうど、そのとき、二人が階段をのぼってきた。

「あ。かつちゃん」

「久しぶり」

「や、やあ」

二人はかつちゃんが握ってる包丁を見て、ビビる。

「かつちゃん。物騒なものはしまえよ」

「いいや。光男。オレはお前と悦子を許さん。刺す」

「そうはいつでも、かつちゃん。かつちゃん、二十年も東京にいたんだから、仕方ないだろ」

「許さん。刺す」

二人はどうしたらいいんだと困った顔をする。かつちゃんは昔から頑固なところがあることを知っていたのだ。

急に雨が降った。

ざああああああああ。

「まあ、中に入って話でもしよう」

「ケーキあるかい」

「あるよ」

「紅茶はあるかい」

「あるよ」

「よし。じゃあ、わかった」

三人はドアを開け、中に入った。

「なかなかいい部屋じゃないか。くそ。本来なら、オレと悦子が一緒に暮らしていたのに」

「かつちゃん。いきなり、みつちゃんを刺しちゃいやよ」

「ふん。わからんね。いきなり刺すかもな」

かつちゃんは包丁を振り回した。二人は震え上がる。

「まあとりあえずは、ケーキと紅茶を出せ」

「う、うん」

いろいろ話し合った結果、かつちゃんは、あきらめた。あまりに二人がラブラブだったので、これはしょうがないと思ったのだ。しかし、かつちゃんの怒りは収まらない。

かつちゃんは、街をさまよい、瞬間、天から声が聞こえた。

「克夫。お前、ここで包丁振り回すと気持ちいいぜ」

「だ、誰ですあんだ」

「わしか。わしは神じゃ」

かつちゃんは、前を歩いていた老婆の背中を刺した。

「うぎゃああああああああああ」

ざああああああああああああ

光男は新聞でかつちゃんが逮捕されたことを知った。

「ふうん。やつぱりかつちゃん、怒ってたんだな」

「でもしょうがないよねえ。あたしたち愛し合ってるんだもの」

「まあ、かつちゃん、死刑だろうねえ。70人も殺してしまえば」

「ほんと。よく殺したもののねえ。大したものだわ」

二人はキッスをした。

ざああああああああああ

照る照る坊主が悲しげな顔をしている。泣きたい顔だ。

最初に刺された老婆の孫、山村山次郎は、復讐がしたかった。おばあちゃん子だったのだ。

まだ小学生だが、怒りは持つてる。

山次郎は、包丁を握り締め、かつちゃんがいる刑務所へ行った。

「おい。克夫。面会だ」

「誰だろ」

面会室。

「克夫。オレはお前を殺してえんだ」

「お前、誰だよ」

「お前が刺したばあちゃんの孫。山次郎。山村山次郎だ」

「ぶつ。おもしろい名前だね」

「なにい」

山次郎は、ガラスを殴った。

「いててててて」

拳から血が出た。

「どうだ。山次郎。オレと勝負しないか」

「どういうことだ」

「オレとお前が包丁対決をして、勝った方が刑務所から出て、負けの方が刑務所にいるんだ。どうですか。看守さん」

「いいですよ。面白そうだ」

「山次郎。お前はどうか。びびってんのか」

「うるせえ。びびってねえ。いいじゃねえか」

そんなわけで、看守は、こういうルールを決めた。一分間で何人刺すことができるか。刺した人数によって勝敗を決めると。

「ところで、誰を刺すの」

「募集しよう」

昼の放送で、刺される人を募集した。まったく集まらなかった。仕方ないのでルールを変えた。

同じ種類のまぐろを使い、それでおいしい料理を作った方を勝ちに

するという、健康的な包丁対決にした。

「いいね。これなら死者が出ない」

「でも、つまんねえな」

「まあな」

しかし、やるしかない。

かつちゃんと山次郎は、厨房に入った。

しかし、二人きりにさせたのがいけなかった。二人は包丁を向け合い、にらみ合ってる。

「ぶっ殺す」

「てめえ死ねや」

相打ちだった。二人とも、床に倒れた。

ざああああああああああ。

二人は医務室に運ばれ、美人の先生に介抱してもらった。

「ありがとう先生」

「すてきだぜ先生」

「あんたら本当にバカだよ。でも、そこがすてきよ。純真だわ」

山次郎とかつちゃんはえへへへへと笑う。

ざああああああああ。

外はますます雨が激しくなった。

かつちゃんと山次郎は、握手した。昨日の敵は今日の友ってわけだ。いがみ合ってるうちに友情が芽生えてきたのだ。

しかし、給食の時間、うつかり、かつちゃんが山次郎が大事にとっておいたプリンを勝手に食べてしまった。

「てめえ殺すぞ」

「いらないのかなと思って」

二人は再び、包丁を握り締め、対峙した。

アホや。こいつらほんまのアホや。救いようがない。

看守は、山次郎に、オレのプリンあげるよと言って、山次郎にプリンをあげた。

山次郎は怒りを収めた。

そのすきを見て、かつちゃんは、山次郎の胸を刺した。
「うぎゃあああああああ」

（後書き）

後書きなんて書きたくねえ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0575y/>

ライス2000・ライス2000

2011年10月30日17時19分発行